

コロナ禍でのランボー症候群

山形市保健所長 加藤 丈夫

「ランボー症候群」という言葉を聞いたことがあるだろうか。おそらく、聞いたことのある人はいないと思う。これは映画「ランボー」から私が勝手に作った造語だからだ。映画では、弾丸が雨あられのように飛び交う戦場で、シルベスター・スタローン扮するランボーは勇敢にも敵に向かって突進するが、不思議にも彼には弾丸が当たらない。映画を見ている人は、これは映画の話であり、現実こんなことが起こると思う人は誰一人いないと思う。ところが、健康問題に関しては、この非現実的な妄想から脱却できない人が少なくないことを、私は常々、実感している。

その一つは喫煙。喫煙は肺がんの主要な原因であることは既にほとんどの人が知っている。それにもかかわらず喫煙者が禁煙できないのは、ニコチン依存症という側面に加えて、「自分はタバコを吸っても肺がんにならない」という根拠もない妄想に取りつかれているからではないか。これはランボーが弾丸の雨の中を突き進んで行くのと似ている。

最近、私がランボー症候群を実感したのは、新型コロナウイルス感染症だ。この感染症は、ほとんどの場合、ウイルスを含んだ飛沫やエアロゾルを口や鼻から吸い込むことで感染する。したがって、マスクを正しく着用する（“鼻出しマスク”などはダメ）ことは最も効果的な感染予防策である。一方、会食やカラオケなどは、マスクを外して会話や歌唱するので、大量の飛沫やエアロゾルを飛散したり吸い込んだりする危険な行為だ。国・自治体、保健所等では、会食やカラオケに関して繰り返し警告を発している。それにもかかわらず、カラオケ・スナックでマスクなしで歌い、多くの感染者（クラスター）を出してしまった例は山形市を含め全国

に多数ある。世界史に類を見ないコロナ禍の真っ只中でも危険な行為をする姿は、ランボーが弾丸の飛び交う戦場を突進する姿を連想させる。知識として危険性を知っていても、「自分は感染しない」「自分は例外だ」という妄想から抜け出せない。現実を正しく冷静に受け止める「知性」と「感性」がほしいものである。

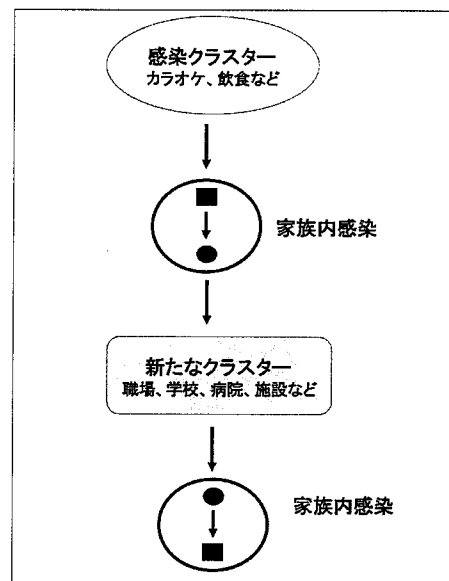


図. 新型コロナウイルスの感染の連鎖

コロナ禍においては、さらに深刻な事態を招くことを私達は山形市の事例で学んだ。軽い気持ちで行ったカラオケや飲食などで「感染クラスター」が生じ、感染者がウイルスを家庭に持ち込み「家族内感染」を惹起し、さらに、感染した家族がウイルスを職場など（職場、学校、高齢者施設、医療機関など）に持ち込み、次の「新たなクラスター」を発生させるという「感染の連鎖」が生じたことだ（図）。この過程で小児・学童・受験生などを含め多くの人が感染の恐怖に曝され、実際に感染した人も多い。彼らに堪えがたい苦痛や苦悩を強いた現実があることにも思いを馳せてほしい。